

当院における透析患者の肝炎ウイルス感染についての実態調査

第 55 回 大阪透析研究会

第 25 回 大阪府医師会医学会

脇川 健・山田明子・河合右展・佐々木敏作¹ / 丸山禎之・和田 茂² (大阪掖済会病院 内科¹ / 透析室²)

【目的】当院血液透析患者の肝炎ウイルス感染の実態を調査し、検討を行う。

【対象と方法】当院血液透析患者 104 名 (死亡者も含む) を対象とし、1990 年から 2000 年の過去 10 年の肝機能検査および肝炎ウイルスマーカー (HBsAg、HBsAb、HBV DNA ポリメラーゼ、HCVA b、HCV RNA、GPT、 γ -GTP、AFP) の変化について調査した。

【結果と結論】全期間を通じて HCVA b 陽性率の方が HBsAg 陽性率よりも高値を示した。1999 年度末の日本透析医学会による調査報告では、全国平均で HBsAg 陽性率は 2.0%、HCVA b 陽性率は 5.6% であるのに対して、当院では、HBsAg 陽性率 3.9%、HCVA b 陽性率 29.7% と高値を示したが、これは当院では透析導入時から陽性の方が多くみられたためと考えられた。当院では導入時からの HBsAg、HCVA b 陽性率が高いが、過去 10 年間で陽性率の変動はなかった。HBsAg 陽転患者数は 7 名 (陽転化までの期間 90.9 月)、HCVA b 陽転患者数は 6 名 (40.8 月) であり、ともに特定時期の陽転患者数の増加は認めず陽転化による肝機能の変動も認めなかった。また、HBsAb 陽転した患者 7 名のうち 5 名に輸血歴があり、HCVA b 陽転した患者 6 名のうち 3 名に輸血歴があり、輸血による影響も考えられた。HCVA b 陽転した患者 6 名のうち HCV RNA 検査を行った 4 名はいずれも感度以下の数値を示し、HCV RNA 高値を示した患者は、導入時より HCVA b 陽性を示していた。透析歴と HBsAg、HCVA b 陽性率との相関は認めなかった。